小田切秀雄　野間宏　竹内好

日本プロレタリア文学大系

3

運動開花の時代　上

「戦旗」創刊から文化連盟結成まで

三一書房

日本プロレタリア文学大系　3　定価一二〇〇円

一九五四年十月三十一日　第一版発行
一九六九年四月十五日　第四刷発行

編者代表　野間宏
発行者　竹村一
発行所　株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京（二九一）三一三一～五
振替東京　八四一六〇番
郵便番号　一〇一
印刷　文栄印刷株式会社
製本　有限会社佐伯製本所
落丁・乱丁本はおとりかえします

© 1954年

全9巻　第4回配本

第三卷

「運動開花の時代」

凡例

一、収載作品はできるかぎり初出の新聞・雑誌によって校合した。ただし仮名づかいはすべて新カナに改め、伏字はおおむねもとのままとした。

二、収載作品の配列は、小説・戯曲、評論、詩・詩論、短歌、俳句の各文学ジャンル別にしたがった。無署名のアッピールなどは資料として評論の部に編入した。

三、各ジャンル内の収載作品は、原則として発表年月順によったが、ときに執筆年月によって配列した場合もある。

四、短歌・俳句の作品選定は、各巻をとおして、渡辺順三、栗林一石路の両氏に協力をあおいだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第三巻目次

I 小説

十姉妹……山本勝治……三
氾濫……黒島伝治……一七
黒人の兄弟……江馬修……四二
牧場を追われて……鶴田知也……五九
生ける人形抄……片岡鉄兵……七四
傷だらけのお秋……三好十郎……八四
豪雨……立野信之……一二五
一九二八年三月十五日……小林多喜二……一三七
朽ちゆく望楼……間宮茂輔……一八五
鉄……岩藤雪夫……二一二
鉄の話……中野重治……二六四

II 評論

プロレタリヤ・レアリズムへの道……蔵原惟人…二七七
いわゆる芸術大衆化論の誤りについて……中野重治…二八四
芸術運動当面の緊急問題……蔵原惟人…二九〇
戦線統一から具体的な活動へ……山田清三郎…二九七
形式主義文学説を排す……勝本清一郎…三〇三
政治的価値と芸術的価値……平林初之輔…三一三
作品に於ける左翼社会民主主義の暴露……窪川鶴次郎…三二一
平林初之輔氏の所論その他……川口浩…三二五
谷川氏のマルクス主義文学理論の批判の批判……青野季吉…三三一

III 詩・詩論・短歌・俳句

詩

坑内の娘……松田解子…三四三
おりゃ朝鮮人だ……金柄昊…三四四
檻の中……波立一…三四五
労働する女たちよ……長谷川進…三四五
落馬した兵士……江森盛弥…三四九
河……森山啓…三四二

南葛労働者……森山啓…三五三
敗れて帰る俺達……三好十郎…三五四
居残りの夜……高木進二…三五六
「三月十五日」に送る……松崎啓次…三五七
立毛押えに抗して……上村実彦…三五九
朝のデモ……仁木二郎…三五九
広場より……仁木二郎…三六〇
故渡辺政之輔を悼む……大谷圭三…三六一
勲章……宮不喜久雄…三六三
プロレタリアの子守唄……大滝友二…三六四
奴等の仕打ち……岡田頌二郎…三六四
拷問を耐える歌……田木繁…三六六
汽車の中で……秀島武…三六七
野性の花束……佐藤獄夫…三六八
寂しい音……平沢貞二郎…三六九
一人の少女の死……平沢貞二郎…三六九
夜刈りの思い出……中野重治…三七〇
おいつ安んぜよ……小林園夫…三七一

短歌

一ロボットの手記……幹　憎太……三七三
呪わしき世相……井上義雄……三七三
チリメン工場その他……柳田新太郎……三七三
第十回メーデー……矢代東村……三七四
鎖の一環……南　正胤……三七五
小作争議……飯田兼次郎……三七五
百姓の味……大鳥居金一郎……三七五
旋風の中へ！……伊沢信平……三七六
浚渫船……岡部文夫……三七六
街頭進出……前川佐美雄……三七七
永代橋……坪野哲久……三七七
争議断片……古田富郎……三七八
新労農党結党式……相田省二……三七八
工場のなか……佐藤　英……三七八
鉱山から……佐藤栄吉……三七九

俳句

横山賀茂水……三八一

栗林一石路…三八二
橋本夢道…三八三
新井夜雨…三八三
上野冬生…三八四
浜口弥十郎…三八四
小沢武二…三八五
小林空車…三八五
土呂工夫…三八五
野田混迷人…三八五
神山木石水…三八六
吉田立鳥…三八六
千原昧且…三八六
中野風葉…三八六
中村苦味生…三八六
鷹取源一郎…三八六
奥村竹路…三八七
横山梨青郎…三八七
浪本蕉一…三八七
熊沢沙郎…三八七

I

小

說

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

十姉妹

山本勝治

田面には地図の様な線条が縦横に走って、旱の空は雨乞の松火に却って灼かれたかの様に、あくまでも輝やき渡った。情けないほどのせせらぎにさえ仕掛けた水車を踏む百姓の足取りは疲れた車夫の様に力がなく、裸の脊を流れる汗は夥しく増えた埃りに塗れて灰汁の様だった。

そして、小作争議事務所に当てたS寺の一室は日増しに緊張して行った。

「おい、遂々、彼奴等白東会を雇いやがったぜ」引裂く様に障子を開けて入って来た藤本は、一座をにらみ廻して報告すると、新たに現われた敵を、眼前に挑む様に唇を噛んだ。居合わせた者は一様に肩を揺すり眼を据えた。

「知ってやろ、この県の白東会の支部長云うたら、ほら、この間町でコーヒ呑んだやろ、あの時隅に坐って俺達をにらんでいた紋付の羽織着てた奴、彼奴だよ、永い間東京をうろついていた、そら、町の前川新聞取次店の息子や…」

「ああ、胸毛の生えた、柔道二段とか云う、心臓の強そうな…」と、誰かが訊くと、藤本はグッと首肯いて胸を張った。

「そうや、あれで江戸仕込みの壮士そうな、どうせ、腕力と心臓の強いだけが取柄の男さ、けど、注意せんと彼奴等の唯一の戦術である「切り込み」があるか知れんぜ、地主からだいぶ金も出てる様子やから…」

藤本の歪めた唇には、激げしい敵慨心が、冷めたい微笑となって漂っていた。同じ想像と期待に、一座の顔は潮の引く様にすっと蒼ざめて誰れもが深い溜息をついた。

慎作は、勿論この報告に衝撃を受けた。が、その衝撃が忽ち火に落ちた錫箔の様に崩折れて、燃えあがるべき反抗心が、雑草を揺がす一戦ぎの風ほどの力しかないのを如何することも出来なかった。一寸ひるがえった心が、直ぐと暗い懐疑と姑息な内省に重くよどんでしまった。慎作は、新しく刺戟されて炎の様に闘志を沸き立たせて居る同志の前に、深く自分を恥じた。同時に、この心の秘密を持ちつつ、同志と共に嘆き共に憤っているかの様に装っている自分に、たまらない憎悪を感ぜずにはいられなかった。やっぱり俺は駄目だ。この刺戟に於てさえ、自分の心は豚の様に無感動だ、俺はいよいよ戦列の落伍者だ。何時、何処で、どうして、あれほどに燃えあがっていた意識が、常夜燈の様に消えることのないと信じ切っていた反抗の火が、かく

まで力弱くされたか自分ながら不可解だった。いや、諸々の原因は数えあげることは出来たが、その諸々の原因そのものが本来ならば胸の火をより燃え熾からしむべき薪である筈だった。この新しい薪であるべき事柄が、何時の間にか石綿の様に燃えなくなった以上に、却って自分を卑怯にする鞭の役目を努めるとは、前線に立つ者にとって致命傷だと思った。だが、この理智に頓着なく慎作の心は懐疑に燻って羊の様に繊弱なものになる一方であった。理智と思想に於てはまだ、決して曇っていないと確信しているだけに、この脆弱な感情の泥沼から匐いあがろうとする焦燥は一倍強かったが、次々と周囲に起る事柄が反抗を薄めて、不可抗力に裾をかまれた様に動きがとれないのだった。

そうだ。第一に暗い一家の現在が、慎作をひしぐ力の最大なものに違いはなかった。

前年からの借金が抜けない上に、養蚕の不成功に次ぐこの大旱だった。家産を傾むけた正直一途というものよりほかに何の才能も持合せない父は、目前の仕事を唯がむしゃらにするより思案がなかった。日向を追っかけ廻る様になっても、まだ維新当時、区長という大役の下命された名誉を、晩酌の酔と共に吹聴することを忘れない祖父は、去年の春、祖父そっくりの頑固者だった兄が死ぬと共に飾るべき何者もなく、只ストーブのように温かい資本家を憎む思想と感情とを土産に、顔を蒼くし髪を長くして帰郷するやいなや、農民運動に寧日ない慎作を目の敵にして、事々に小姑の様な執拗さで楯付いた。母は洗濯とボロ綴りに総ての時間を消費し、妹の絹は、あどけなさと快活な足音とを何処かで失くした様な佗しい小娘だった。

催促のはげしい負債返還の日が近づいても、一年の衣類代と肥料代に当てるべき養蚕の上り高さえ予想外に少くない現在如何にし様もない事は、碌々碌ぎを手伝えない慎作には身に沁みて分かっていた。仙人の様にしなびた脛を、一種超然たるあぐらに組んだ祖父は、落着き過ぎた下半身とは反対に顔を無闇にガクンガクンさせて、切抜け様もない窮迫を、慎作と父のせいにして怒鳴り立てた。

「ほんまに如何する気や、お前等呑気そうに黙ってくさるが、今度こそわしにも見当はつかんぞ、おい慎作、お前の…その何や、新しいとか云う頭で考えついたこと云うてみい。ヘン、こんな世帯智慧は出まへんがな、直造かて、足しにもならん水換ばかり能やないぜ、何んとか法見付けたらどうやね」

七十八にしてはまだ弾力のある声だった。父は眼を眇める様にしてチラと慎作を一瞥しただけで黙っていた。皆の無視的な態度が祖父の尖がった肩を余計に厳めしくした。

「組合やたら、何やたら、碌でもないことばっかり仕腐って、ええ若い者が何の様や、一ペンでもええから、絹に一枚の木綿物位、買うてやってみい、罰は当らんぞオ」

だが、慎作は祖父の毒舌には別に反感も覚えなかった。無理にいからした肩も尖先の様にとがり、憎まれ口も歯の

ない唇にもつれるのを見ると、寧ろ哀憐が先に立った。祖父と違って父は、組合運動のため蕩児の様に家を明ける慎作を責めなかった。時々開催する演説会等にも、祖父だと「文章規範も碌に読めんそこいらの青二才の話し見たいな、へッ、あほらしゅて聞けまへんわい！」と鼻先で嗤って、てんで問題にもしなかったが、父は、暇の許す限り出席した。慎作が興奮して卓を叩き、拍手の前に一寸見得を切る時等見ると、大抵父も遠慮勝ではあったが、パンパンと手を叩いて、少なからず得意気であった。それは慎作の演説に共鳴すると云うよりは、何でもよい自分の息子が人前で拍手されることを祝福する、愚かな親心の飾らない現われであるらしかった。慎作はそれをくすぐったく思ったが、併しこの父のたとえ子煩悩からの支持にしても、家の中では古い豪傑の様に威張り返って居る祖父の手前、甚だ心強くもあった。必然、父は板ばさみになった。そこへ母は、父に譲らない引込思案の女だった。祖父が「体あたり」式な論法、糞味噌に慎作をやっつけ、しいては、それを黙視する父自身にまで鋭鋒を向けてくると、流石に父も、昔の思想習慣に引戻されて父親としての責任も考え出す様ではあったが、それでも、丁度赤穂浪士の様に苦難して百姓達の幸福の為に闘うのだと勇んで走り廻って居る慎作の決心の様を見ては、どうしても口に出しては攻撃しかねる様だった。それに慎作の演説会場に於ける一種の勇姿も、鳥渡捨てかねる風でもあった。兎も角父と母との思惑は水銀の様に動き易く難かしく言わば「対立」するところの祖父と慎作との間を、振子の様に行ったり来たりした。

ある日だった。

慎作は帰宅するとすぐ祖父に摑まって、宣言的に言い渡された。

「おい、お前は反対やそうだが、こうなったら背に腹は換えられんさかい、どうせ、肥代にも、足らん金や、繭の金で小鳥飼おうと思うのや、今、流行ってる十姉妹な、あれに定めたんや」

慎作は、吐胸をつかれて言葉がなかった。愈々来た…ある決定的な問題が、突然、目前一杯に立はだかった様な気がした。

民衆への救いでもあるのか、或は悪魔の手弄みか、実際この十姉妹の流行は、一時天下を風靡した万年青と同じく、不可解な魅力をもって、四国を発端にして中国近畿、殊に慎作の故郷附近には、感冒より凄じい伝染力をふるった。この小鳥は、安易な世話と僅少な食餌代とで六十日目毎に幾つかの雛鳥を巧みに巣立させた。巣立った雛は飛ぶ様に売れて、それで親鳥の代価は完全に償われ、後は全くお伽話の様に金の卵を産むに等しかった。憑かれた様な流行力は、何の変哲もなく、只日本人の如く多産であると云うだけのこの鳥に「白」だとか「背残り」だとか「チョボ

一」だとかまるで骨董の様な種別を創造し、価値の上には相場の様な変動を生みつけた。需給の関係等は悪宣伝と浮気な流行心理の後ろに霞み去り「飼鳥」と云う純粋な愛鳥心等も病的流行の前に死滅し、そこには唯、露骨な殖金の一念ばかりがはびこった。にわかの小鳥屋が相継いで出来、遊人は忽ち役者の様に小鳥ブローカーとなりすまし、連日の小鳥の市で席貸するお寺には厄病時の様に金が落ちた。事実、この流行力が存続する限り損失者は殆んど例外で、十姉妹はインチキ骰子同様だった。

「阿呆奴、今に暴落が来るぞ」と嘲笑していた人達が、何時の間にか悪夢の捕虜になって、ぞくぞく渦に巻きこまれた。早りで、田に旧い餅の様な亀裂が出来初める頃には、地道な百姓達までが鳥籠を造り出した。それは全く異様であった。行逢った人達は、天気の挨拶より早りの噂より先に十姉妹の話だった。それは唯、不景気の病的な反動だとだけでとり澄ましていられなかった。個人を利己的に、歪めて一攫千金を夢見させる事に於て、賭博に譲らない蠱惑を持っていた……

慎作は今、祖父から唐突に飼鳥を言い渡されて、足許に火のついた驚きを味わずにはいられなかった。

「お前が、なぜ反対するのか知らんけど、見て見い、拡がる一方やないか。これから東京や北海道の方へも、どしどし出るそうや、ほんまに、これこそ間違いない内職やぜ、こんなええ事、又とほかにあらへん！」

是が非でもこの思い付は実行するぞと云う意気込みは、曇みかけるような口吻に明かだった。

「金が儲かる儲からんは別問題だよ。僕の反対するのは、どれだけ苦しゅても、こんなばくちみたいな流行鳥を飼うなんて、如何にも心を見すかされるこっちゃし、それに、この前の万年青みたいに何時がらが来るか分からんし…」

慎作は、若し正面切って反駁して行ったら、八歳の様にカッとして枯枝の様な腕をも振りあげかねない祖父なので、出来るだけ調子を柔げ静かに言い続け様としたのだが、もう祖父は、怒った時の癖である首をガクンガクンさせて管を巻くようにいきり立った。

「儲かる儲からんは別問題やで！　何をぬかしやがる阿呆め、金を儲けたいさかい、苦るしいならこその話しやないか、これこそ窮余の一策ちうのや！　それに、まだまだ暴落なんか来るもんかい、誰かてまだ二三年は受合や言うてるし、おれ、今日仏さんの前でけんとく（予想）みたんや

「吉兆」と心の底で声がしたわい」

「そら分かってる。苦しいから鳥でもと思うのはよく分かってるが、そうやないのに祖父さん、おれの言うのは、一羽二羽楽しみに飼うのと違うて、大切な資本をかけて小鳥屋みたいに鳥飼うて、そら今日も鳥の市や、明日は西応寺で交換会や、そら「背残り」はいっぺんに二十円も値が上った。ほら何、ほら何やと、百姓がまるで相場師みたいに

なるのが間違うてると云うのだ。この旱りと繭の不作で苦しいのは、今切り抜け様と、皆が結束して争議を起してる最中やないか…」

「へん、偉そうなほげた吐かさんとけ！　小作争議みたいな、第一お前等が先頭やないか。負けるに決まってる。小鳥で儲かるのは、ちゃんと見えたことや、ここ二年三年のうちに、何千何万と儲けた人が幾人あるか分らん位やないか。小鳥で儲けたら、小作料を負けろって、徒党なんか組んで騒がんでもええのや…」

「それがいけないのだ、争議に加わっている者のうちでも、だいぶ十姉妹に色目つかう者もあるけれどその度におれは云うのだ。十姉妹の流行など決して永久に続くものでもない。と云うと、たとえ流行ってる間だけ飼うて助かりたいと云うかも知れんが、そういう心は、自分一人だけよかったら、他の者は構わないって云う心と同じだ。百姓は百姓として働き、それで如何して食えなんだから、それは、天候と地主と社会全体の責任だから、その時は百姓は一致団結して…」

「ええい、黙まらんかッ、この社会主義奴！　十姉妹は大丈夫やわい、この勢いやったら世界中ひろまる！」

「とにかく、おれはこの理由のもとに、蚕の金で十姉妹飼う事は大反対だ」と慎作は断定的に併し半分はおどけた顔色を忘れずに云った。反射的に、多分祖父は喉で呵んだのだろう、声は出ずに唇が「何！何!!何!?」と云う風に動いた。すぼんだゴム風船の様にペロペロ皮膚のたるんだ頸が驚くほど延びた。慎作は、この一徹な祖父を納得させるだけの言葉を知らない自分が腹立たしかった。いや、自分の思想を如何に噛み易く柔かなものになし得ても祖父の歯牙は、既に郡長授与の刹那に於て抜け落ちてしまったのを如何せん…であった。

その夜、父は、祖父と慎作との間で眼の遣り場に困った。

「お父っつぁんの様に云うたかて考えもんやぜ、慎作が反対しよるだけでなく、なんぼ流行かって、きっと儲かるもんとはきまってやせんしなあ…それに、もう遅いわい！」

だが、その事より何より、父は慎作の意嚮に気をかけていることは確かだった。父にしてみても、不成功だった養蚕をこの鳥で、或はとりかえされるかも知れない事は、何に増しの誘惑であるに違いなかった。

「いや、儲かる、世間をみたら分かるこっちゃ、一体誰れが損をしよったんや？　皆、儲けてるやないか、この村でかって、十姉妹飼えんのは慎作みたいな因果な息子持った家だけや、慎作に何の遠慮があるや！　飼う言うたら飼う！」祖父は唾を飛ばしてあくまで決定的であった。

「そやなあ、どっちにしてみてもええ考えやが、十姉妹でも儲かったら、少しは助かるのやけども…」余程、心動いたらしい母が横から口を出すと、父は何時になく顔を赤くしてたしなめた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com